

FACE

Dec 2009 vol.2

【フェイス】

医療法人社団 喜英会
加瀬ウェルネスタウン



●使用写真は、全て実際に入居している方と職員を撮影したものです。

Kase
Wellness
Town



特集1 ターミナルケア

特集2 ウェルネスタウンの大家族



c o n t e n t s

[目 次]

1. 卷頭言 1
2. 特集1 ターミナルケア 3
3. 特集2 ウェルネスタウンの大家族 13
4. 編集後記 27

特集 1

ターミナルケア

特集 2

ウェルネスタウンの大家族

1

巻頭言

社員代表

高橋 恒夫
(工学博士)

1995年10月

着陸態勢に入ったJALの私のシートの窓から見える上海浦東国際空港の周りに広がる田園地帯は、私が幼い頃見てきた風景と同じで、なぜか懐かしさがこみ上げてくるのでした。

今から51年前母親はここ上海の外国人租界区外灘(ワイタン)の日本人街に住んでいて、日本に帰国する日を待ちながら生活をしていたのです。

中華人民共和国上海同濟大学(中国政府国家国務院直轄大学)工学部 工程力学研究所 この長い名称の研究所が私のスーパーバイザーとしての勤務地です。上海浦東国際空港には私よりも若い教授が2名迎えに来てくれていました。その一人は東北大学に国費留学生(日本国の招聘)として研究に来て3年で博士号を取得した教授でした。彼らの案内で同濟大学のキャンパスに行き、研究所の教授、研究員達と研究の方向性とその成果について話し合い、その後私の希望していた蘇州の町を案内してもらうことについて少し話をしたのでした。

蘇州までは、大学の車で約2時間30分くらいかかったと思います。私にとって初めての中国、そして最初の訪問地蘇州を案内してもらい、その1つに蘇州西園がありました。

蘇州西園は元の時代建造され、四大天王殿、本殿、五百羅漢堂観音殿、藏經楼からなっている中国でも有名な寺院の1つでもあります。

この寺院で私は、自分と運命的な出会いを感じる名僧と会うことになるのです。なぜならば、この後1年に1度7年間も会いに行くのですから……

出会いと言っても名僧の「像」との出会いなのです。名僧の名前は済公活仏(ジーコかつぶつ)と呼ばれていて、南宋の紹興18年(1148年)に生まれ嘉定2年(1209年)に61歳で卒した台州の人です。

済公活仏の像は五百羅漢堂観音殿の中央に立像し、正面から見る顔は普通の表情で、右側の方から見る顔は泣いている顔でもあり、怒っている顔でもあります。左側から見る顔は笑っている顔でもあり、悲しんでいる顔でもあるのです。

最初私はこのことに気づかなかったのですが、同僚の教授から教えてもらい気がついたのでした。まるで、生きている人間に見え、一人の人間の「一生」を見ている様に感じました。

私個人の考え方になりますが、人間は「生まれ」て「生き」て「死」んでゆきます。「生まれ」ということは本人の自己責任という観点で言えばどうにもならないことです。しかし「生まれ」た以上「生きる」という人生の中での人間は、無限の可能性と夢と希望そしてその反対に苦しさや悲しさもあります。これは自己責任で判断、決断した結果からなるものです。そしてターミナルになり「死」=「生まれきる」があると思っております。この「死」ということは、自己責任ではないと思っております。自然の摂理ですから……

ゆえに人間は、今日一日を大切に生きてゆきたいと思うのです。

加瀬ウェルネスカウンタには現在0才から104才迄の「人生」がありますが、自己責任が行える人はまだこの施設には入所出来ないので。加瀬ウェルネスカウンタには人間としての基本的価値観、人間性を育むことが出来る「なしの美保育園」。生きて良かったなあ!自分にはいっぱいの思い出があるという自分の人生を振り返ることが出来る「入所棟」。があります。少なくともこの入所棟の人々に対し、ほんの少しの夢と希望、笑い、生きて来てよかったですなあと思ってもらう心、そして人間としての尊厳を失うことなく看取りが出来る介護、これらのが加瀬ウェルネスカウンタの答えとして出してゆかなければならぬテーマと考えております。

入所棟の自室で眠っている人々の顔を見る時、蘇州西園の済公(ジーコ)の顔を思い出し、そして自分の母親の多感な人生を考えさせられ、これらが重なり合い人間とはなんて素晴らしいものなんだろうと思い、そういう私も自然の摂理に一歩一歩近づいていることを感じ取る昨今です。

特集 1

ターミナルケア

特集 2

ウェルネスタウンの大家族

特集 1

ターミナルケア

ターミナルケア『看取り』

～本人、家族、スタッフの関わりを通して～

《はじめに…》

私共の加瀬ウェルネスタウンは開所からお陰様で7年目を迎え、これまでご利用者様はじめご家族様、地域の方々の温かいご支援のもと、様々な活動に取り組んで参りました。目まぐるしく変化する社会情勢の中、介護保険制度のもとで日々サービス提供できることは、ひとえに皆様方のおかげであると深く御礼申し上げます。

さて、今回のフェイス2刊の発刊にあたり、施設におけるターミナルケア(看取り)について、施設で最後を迎えてました1名のご入居者様にスポットを当て、『死とはどうあるべきか』また、『介護老人保健施設におけるターミナルケアの在り方』を家族との対談形式で載せてています。

今回、その中で見えてきたものやまた新たに考えさせられること…職員を始めとする様々な職種が『死』を見つめ、深く考えされることとなりました。

今後は、重度化した入居者が多く介護老人保健施設へ入ることが想定され、尚且つ、介護老人保健施設においてもターミナルケアの重要性が重視され、ますます需要も増えてくると考えられます。

また、私共の理念にも関わる『共生』が、大家族としての取り組みをまとめております。自施設の取り組みや関わりも含め、フェイスをご覧になられた方が少しでも『死』と言うものを深く考えていただければ幸いです。

終末期医療(介護)についての私的見解

施設長兼加瀬クリニック院長 赤羽 勉

平均寿命が60代前半であった1950年代からたった60年で、日本は人生80～90年の時代になってしまった。これは戦後復興の時期の栄養状態の改善や先進医療の導入などにより、一気に伸びた寿命がその後も徐々に伸び続けた結果である。経済危機など様々なストレスや飽食、ジャンクフードなどによって、メタボ患者が目立つ我々世代が老年期を迎える40年後にはどうなるか将来は不明だが、現在は世界一の長寿国となっている。

その死因をみると、癌死が30%ほどを占めて辛うじて一位の座を守っているが、脳血管・心血管病変を合わせると癌死を抜き去って首の差で一番に躍り出る。血管病変による死亡には血圧やら糖尿病やら様々な要因が絡んでくると思われるが、要するに生活習慣が問題になることが多い(遺伝性の疾患は除いて)欧米並みの食生活や運動不足、ストレスなどが肥満、高血圧に直結することは一般の人でも理解できる。しかし、青年期、壮年期には自分のことに気を遣う余裕もなく、また様々な誘惑に負けて喫煙、深酒、過食についつい陥りがちである。すなわち、日本人の死因の多くを占める生活習慣病というのは遺伝的要素を除けば、言葉は厳しいかも知れないが、私生活を律しきれない人間が罹った疾患による自業自得の結果なのである。とすれば、青年期、壮年期に少し自分に厳しく、生活習慣を見直して頂ければ、年を取ってから薬を飲んだり、食事制限などする必要もなくなるのかも知れない。

基本的に私は入所した高齢者から食事の楽しみを取り上げたり、無理して運動させたりすることは好まない。自分がその年になったら、『食事制限なんてもういいだろう、食べたいもの食べさせてくれ!』

プロフィール

赤羽 勉【あかはねつとむ】

[出身地]長野県

[生年月日]1965年5月2日生まれ

[経歴]

■平成3年／東北大学医学部卒、同年医師免許取得

■平成11年／医学博士(東北大学)

■平成17年／医療法人社団 喜英会
加瀬クリニック院長兼施設長就任

施設長として入居者の健康管理やクリニックの院長として地域医療に携わり、幅広い医療を提供しており、また地域からの信頼も厚い。

[取得している専門医・認定医資格]

■日本外科学会認定医(平成8年)

■インフェクションコントロールドクター(平成14年)

■麻酔科標榜医(平成13年)

[主な症例実績や研究テーマ]

(臨床)

内視鏡外科一般(食道・肺・甲状腺・胃・大腸などの早期癌や良性疾患など低侵襲手術)

(研究)

肺気腫モデルに対するレーザー治療の研究



と思うに違いないからである。自然に任せればご本人の寿命までは元気でいられるものだと考える。

終末期医療という言葉はあっても終末期介護という言葉はなじみが薄い。かつて日本でも年を取つて自分の家でおじいさん、おばあさんが亡くなるということが普通にあって、それが子供、孫にもそれぞれの死生観を自然に形成することに役立っていた時代があった。畠の上で死にたい!と言う言葉が端的にそう言う時代を表している。現在でも在宅で看取るという家庭もあるが、それはごく少数派で、ほとんどの高齢者が病院で亡くなる時代となった。たとえそれが老衰によるものであっても例外は少ない。

さて、それではあなたが年を取つて死ぬ時に、病院で亡くなることを望むか、自宅か、介護施設か、どこがいいだろうか?当然、死因にもよるだろうが、たぶん過半数が自宅での看取りを望むであろう。高齢になった時、癌による病死以外では風邪による肺炎、食欲不振による低栄養、脱水が起きて、腎不

全て亡くなるというケースが多数を占めていると考える。一方、施設に入所する方々はほとんどが日本人の平均寿命を超えている。また、癌の末期患者さんなどはほとんどいない。また例え、介護施設に入所する方にたまたま癌が見つかっても、そのほとんどが80歳を超えており、また脳血管疾患後や認知症患者も合わせればほぼ100%、手術などの侵襲的、積極的治療の絶対適応にはならない。とすれば、施設において具合が悪くなったとして救急病院に搬送したり、総合病院に入院する必要がどこまであるのであろうか?また、本当にその患者さんはそういう医療を望んでいるのだろうか?私は全ての高齢者に急性期医療や積極的医療をする必要がないと考えているわけではない。入所患者さんで食欲不振が続いている患者さんに胃瘻を造るか、このまま点滴を少しだけして自然に診るか判断するのは難しい。しかし、ちょっと頑張れば回復するのではないかと考えたとき、家族が望んだときに私なら胃瘻造設を躊躇しない。それは延命治療ではなく、また元気になって食べられるようになることを期待するからなのだ。

では実際問題どうすればいいのだろうか。施設で患者さんにある程度の医療をさせて頂き、看取ることができればいいのであろうが、現実としては医師、看護師のマンパワーがない。また、癌患者さんともなるとその疼痛管理は困難であり、緩和医療的な薬剤、スキルは現在の施設では圧倒的に足りない。さらに、もし入所している方全てを急変事以外病院に搬送せず、施設で看取るようになれば施設を診る医者が一人では24時間、365日の拘束となり、とてもやってはいられない。施設で終末期医療を行い、看取るようになったら、責任上、その医師は長期の休暇をとることなどは困難になるのである。理想とは裏腹に現実には医師も看護師も自分の生活があり、私などのように外来を診る合間に施設を廻

るようでは、入所者をゆっくり診たり、彼らと話したりする余裕がないのが実際である。

一方、入所した患者さんの家族はどう考えるか。立場上、御家族とお話しすることが多いがその多くは積極的治療を望んでおられないと言うのが印象である。最終的には施設長の判断に任せられてしまうのが現実であろう。

しかし、それが難しい。

老いは父母、若きは我が子と思ひて

その三十年をメスとりて来し

佐藤 隆房

私が以前働いていた病院の祖が唄った詩であるが、医師のあるべき姿を現す、私の理想像と重なるものが多い。患者さんことを考えるときに自分の親であつたら、子供であつたらどうするかという親身になる気持ちが私は一番大事であると思う。急性期医療であっても、どんな医療、介護であってもその姿勢があれば患者さん、家族との信頼関係は築けることができると考える。いくら立派で優秀なお医者様でも患者さんを疾患でしか見なければ、医療不信に陥るものだ。

国は医療費の増大、抑制ばかりを声高に叫び、世論は医師不足を大きく取り上げるが、急性期医療の多くは実は上記したような急変高齢患者の入院医療費が占めていると思われる。施設入所者は、患者ではなく、生活者である。であるからして、具合が悪くなったら病院に運ぶという時代から、施設において終末期医療、介護を積極的にする時代へとこれからは移り変わるであろう。そのように視点をえてマンパワーを分散、配分すれば勤務医の過労などもある程度は防げるかも知れない。その際、看取りの部分については介護保険の上乗せをするなどの介護保険や医療保険点数の改正などして頂ければ案外うまくいくのではなかろうか。

現行の人事配置による介護施設では充分な終

末期医療や終末期介護ははっきり言ってかなり難しいと思われる。しかし、終末期介護に難しいスキルはそう必要はない。医師、看護師だけでなく介護士も含めた専門チームを組むなどして終末期を迎えた入所者や、入所者の家族の立場に立った真摯なサービスが出来れば道は遠くない。むやみに

施設規模を大きくすることではなく、そこで働く人が自分の仕事に誇りを持てるような給与体系や勤務体系を構築する経営改善が行えれば、自然と人は集まり、質の高い医療、介護サービスが提供できるはずである。



加瀬クリニック外観



加瀬クリニック内部

ご家族様との対談

入所介護部長：遠藤 政芳 ご家族様：矢部 元子様

■生い立ち、生き様…

氏名／笠原トクエ様

生年月日／大正5年1月9日

出身地／秋田県横手市生まれ

17歳で東京へ、叔母の家で比較的裕福な生活をしていた。18歳で結婚、19歳で出産を迎える。夫が軍人であったこともあり23歳で未亡人となった。

終戦前に再婚し一緒に生活をしていた。東京の大田区（中小企業の工場が多い地区）で鋳物工場を男が立ち上げ、モーターやカバー等オートバイの鋳造工場を営む。

娘であった元子さんは、父との間で折り合いが悪く、すぐ家を出る。その後両親（トクエ様夫婦）は養子を迎え、弟が出来た。すぐに家を出た為、家族と過ごした時間は短かったと言う。トクエ様は仕事を手伝いながらその後3人で生活され、その人柄から得意先から慕われ、苦しいながらも何とか軌道に乗っていた。

Q 趣味や特技については何かありましたか…？

夫が厳しかったこともあり、何もすることはなく、近所の老人会なども行かせてもらはず、93歳で夫が他界した後は、自由な時間が持て、旅行に行くなど活発になったと言う。

Q 入所までの経緯を教えて下さい…

その後、夫の一周年忌の法要時に倒れ、救急車にて都内の病院へ搬送。その時点で胃に癌があることがわかったが、手術することで寝たきりになることが心配であった為、手術せず、しばらく入院することとなった。

入院期間も長くなり、病院より退院を迫られる。ケアマネージャーや病院側と相談しながら関東近辺の病院を紹介され、転院。なぜかそこではベッドサイドにポータブルトイレを置かれ、歩けるのに、『ここでして下さい。』と言われ、今度はポータブルトイレで失敗すると、『オムツにして下さい。』と、徐々にベッド上が中心の生活となっていました。

ある日、面会時にトクエ様から『指輪がない。』と言われしばらくし、『時計が無い…』病院の担当者へ確認すると、入浴で外した後見当たらないとの返答。それがきっかけで表情が暗くなり、面会に行く度にレベルが下がる姿を目の当たりにする。

『このままでは母が人間として扱われない。』元子さんの生活していた地域（利府町）に施設があると言うことで、申込みをし、診断書作成と同時にとにかく急いで車に乗せ、加瀬ウェルネススタジオへ入所する。

その後の生活…

入居して1週間が経ち、病院とは打って変わり、積極的になっていく。特にレクリエーションのゲームは負けず嫌い。介護度が5から3へと軽くなっていた。

※家族から見た、元気になった要因は？

『各スタッフが本人の希望を聞き、自立できるように見守って介護してくれた。本人は周りの人たち（そこで暮らす入居者やスタッフ）が好きだった。』その中でも紅葉ユニット　萱場CC（ケアコンシェルジュ）が印象的だと言う。『母が本当に慕って、何でもしてください一生懸命な姿に心を開いていた』

とのこと。

母は推理小説が好きで、本をよく読んでいた。印象深い場面に萱場CCが推理小説を古本屋で探しては『ありましたよ!』と言ってよく持ってきてくれたこと。

なぜこの施設を選んだのですか…?

元子さんが民生委員をしていたこともあり、さまざまな私設を見学し、よく内情もわかっていた。仙台近郊の岩切や利府町で探したが加瀬ウェルネステウンが一番だと言う。

なぜか…。

他の施設の中では玄関に入ると誰もいない。あいさつがない。臭いがする。これらが加瀬ウェルネステウンには無かったと言う。

玄関に入ります駄菓子屋があり、保育園、入居者、通所リハビリテーションに通う利用者、クリニックを受診している患者様、そこで働く職員、カフェに来る地域住民があった。そこには活気があり、動きがあった。まず明るい、誰もがあいさつをしてくれる。トクエ様も気に入っていたとの話をきくことができた。施設内(街の中)には利府町の認可保育園がある。その子供達を見てまず、トクエ様は涙したと言う。この環境すべてが影響して母が回復してきたのではないかとの話も伺え、私たちは改めてここで働く意味や理念を振り返ることができた。

本人は、病院にいたころよく『家に帰りたい』ともらしていたとのこと。入居後元子さんが改めて聞くと、本人がこう答えたと言う『ここがいい!』と。

※利用料金などは気になりませんでしたか?

まず空いているかどうかが問題。空いていると聞いてすぐ部屋をおさえていただいた。年金や貯えを考え、やっていけると判断。もし、足りない状況になった場合は、兄弟でだすことを相談しており、お金

の心配はいらなかったと言う。むしろ、ここのすべてが揃っている環境で決断した背景のほうが強い。

※病状が進行する中で、病院へ入院する選択は考えなかつたですか?

本人には癌であることは告知していた。治ることはないし、先生(施設長赤羽勉 医師)からはどうしますか?と相談はしたが、家族としては『延命はせず、苦しまないで逝かなければそれでいいです。』と伝え先生には、『痛みが出てきたら一緒に考えましょう』と言葉を掛けいただき、ターミナル(看取り)を先生もわかつてくれ、うれしかったとのこと。最初は最後まで見てもらえるとは思わなかった。

母(トクエ様)が体調の悪い中で、自分の体調の変化には気づいていたようだが、最後まで回復していくのではないかと言う希望があった。そんなある日、『ラーメンが食べたい』と言われ、町内のラーメン屋へ連れていき、家族みんなでラーメンを食べ、つゆもすべて飲むほど、おいしそうに食べたことがあった。その後、ラーメンを食べたい思いが強くなり、駄菓子屋で販売しているお菓子のカップラーメンを食べ続けていた。しかし癌の進行が徐々に食道を圧迫し、2回目にラーメンを食べにいったときには受け付ける状態にはなかった。家族としては『食べたい』という気持ちに少しでも答えてあげたかったと言う。

死期が近づき…

足のむくみがひどくなり、引いては、むくむと言う繰り返しでした。声の声量も衰え、話すことができなくなる。ある日の昼食、他の入居者の方は鰻が出た。トクエさんはミキサー食ですよと出される。形のあるものが食べられなくても、食べたい気持ちはある…。あとで家族がそっと鰻を持ってきたと言う。おいしそうに食べるが喉を通らない。でも、あの時の顔が忘

れられない。遺言もなく、声が出ない分感謝の表現として両手を合わせお辞儀していました。最後は静かにみなさんに看取られながら息を引き取った。

本人の生前の一言『生きるのも苦、死ぬのも苦』一度元気になったからこそここまで来た。家にいたらここまで出来ない…他の入居者も言っていたが、『良くなれば長くここにはいないよ。』と。安らかに逝くことができて本当に幸せです。

※看取りについて大切なことは?

施設でできることはもちろん限られていることは知っていましたし、もし、ここのシステム(ターミナルをできない)がそうだったら病院と思っていたが、家族としては選択する判断を与えてくださり、『どちらであっても大丈夫』と先生が説明してくれたことが嬉しかった。

家族の一員として、最後の最後まで接し、介護してくださいました。ここへの感謝の気持ちでいっぱいです。また、『ここまでやってくれるか』と思うくらいやつていただき感謝してもしきれないくらいです。自分の親でも家族でもないのにここまで気持ちを入れて関わってくれたことが何より素晴らしいと今でも思っています。

思い出のベスト3を教えてください。

1. 子供と接することができた事。
2. ユニットの職員にわがままを言える事(笑)
3. 言葉にはできない…

言葉に表せないくらいありがたいことばかりで、保育園の子供たちと関わったことやユニットの家庭的な雰囲気。パジャマではなく、オシャレできたことが何より思い出です。

加瀬ウェルネスタウンはトク工様や元子さんにとってどんな場所(存在)ですか?

一番ありがたいところ。親は分け合うことができない。加瀬ウェルネスタウンがあって、ここで生活することができたお陰で親子関係が築けた。親子の距離が縮まった。自分も素直にここに入りたいと思えた、そんな施設です。

最後に…

もう、感謝、感謝、感謝でこれ以上のことばが見つかりません。行事や手伝うことが何かあればいつでも呼んで下さい。すぐ駆けつけます!

(家族対談より)

笠原トクエ様へのかかわりを通して

紅葉ユニット 職員一同

■はじめに…

笠原トクエ様は、他県の病院から加瀬ウェルネススタウンへ入所されました。病院では寝たきり状態だった為にご本人様もご家族様にも不満があったとのこと。入所時にはすでに胃癌であったが、ご本人様には告知はしておらず。私たちは、ユニットの介護職員として施設理念をしっかり認識しながら関わって参りました。その経過と取り組みについて報告いたします。

■生活の記録(抜粋)

入所初日から生活の全てに意欲的で元々の身体能力があったこともあり、ご本人様の要望や希望に合わせて生活が出来るように支援していった。

●ベッド中心の生活から車椅子中心へ。食事もリビングで他利用者様と一緒に召し上がり、移動は自操をするようにしていくと1人でお散歩に行けるまでになった。

●排泄をオムツからトイレやPトイレを使用するようになり自立までいくことが出来た。トイレに行く際には車椅子のフットレストの上げ忘れ等で何度も転倒することもあったが、何度も声掛けをして意識付けを行い、他にもリハビリと相談して対応していく。しばらくするとそのようなことは無くなっていた。

●好きな事の1つの読書が継続出来るように図書コーナーに通って本を借りるようにしていく。毎日読書をし、のんびり過ごす時間が出来た。

●何でも意欲的にこなす性格を活かしながら日課が出来ればと思い、おしぶりやエプロンをたたんでもらうことをお願いしてみるとそれが日課となり、

日課をこなした後は決まってティータイムの時間が出来ていった。

●レクや施設内行事がお好きで特にユニット内で行うレクは負けず嫌いな性格もあり、とても積極的に取り組まれていた。時には弱々しい体からは考えられないその意欲やパワーに驚かされていました。レクも日課となっていく。

■ユニットでの取り組み

今年に入ってからは食事をしても嘔吐することが多くなり、食事量も次第に減少。ご本人様の「食べたい」という希望に沿うように食事形態を変え、ジュース等の飲み物を飲んで頂くことで経口摂取が継続出来るように努めた。

排泄時には体力も落ち、ふらつきがある等のリスクを感じた為、Pトイレの使用を勧めるが、ご本人様の「出来るまでトイレ」という強い希望を尊重して巡視を増やすことで事故予防に努める。入所時より娘様の面会が多くコミュニケーションが図れていた為、状態や状況への理解があり情報交換を行っていくうちに信頼関係が築けていった。

■ターミナルに入り…

夏に入ると全く食事が取れなくなった為、いよいよ点滴が始まり寝たきり状態となつた。

ご本人様の希望の1つである「入浴」は、亡くなる前まで清拭ではなく浴槽に入るという入浴を続けていた。入浴時の表情はとても穏やかで印象深い。調子が良い時には、入浴後の短い時間ではあるが車椅子に離床しリビングにて他利用者様と過ごす時間が作れた。

経口摂取は嚥下に問題があり今まで通りにはいかなくなつたが、氷や飴を舐めてもらい少しでも希望が叶うように努めた。

その後しばらくして永眠。

■ターミナル(看取り)を振り返り最後に

寝たきりの状態になりながらターミナルを迎えていく中で少しでも経口摂取を…排泄を…入浴を…と努力はしてきましたが、もっと何か出来たのではないか?もっとして欲しい事があったのではないか?と考えてしまふ事は尽きず、そのような中でご家族からかけて頂いた感謝の言葉はとても嬉しく救われる気持ちになりました。

T様は弱っていっている体のはずなのに、レクリエーションや行事の時に見せるパワフルで生き生きとした姿は病気なんて忘れさせてしまう位でした。

日々の生活の中に楽しみや習慣を作っていく事・個人の尊厳を保つ事は生きていくうえでとても大切な事であり、自宅では出来ない事でもここに居るからこそ出来る事もあるのだと思います。だからこそ、ここで最後まで一緒に生活を共にする私達スタッフの役割は重要であり、責任があると改めて実感しました。

T様と最後の時まで一緒に過ごせた事は私達スタッフにとってかけがえのないものであり、そして沢山の事を教えて下さった事に今は感謝の気持ちでいっぱいです。

《終わりに…》

施設長にはこの度、終末期の医療と題して幅広い観点からお言葉を頂戴しました。施設では今、ターミナルケア（看取り）が増えつつあります。それは、当施設が在宅＝施設という中間施設から終の棲家へと意識や実際の面でも移ってきている証拠でもあります。老健と言う概念のはざまで揺れ動く現在では、本来の中間施設としての役割や、こうした看取りまで対応しなければならない状況を踏まえ、日々悩みながらケアを提供しています。

他の施設においても同様のことが起きているのではないか？こうした状況の中で互いの施設間でより情報を共有しながら宮城県全体のケアの質が向上することを願ってやみません。

特集1

ターミナルケア

特集2

ウェルネスタウンの大家族

特集2

ウェルネスタウンの大家族

世代間交流『秋祭りへ向けた取組を通して…』

《はじめに…》

スウェーデン、フィンランドにおける海外研修を通じ、視察メンバーが自施設において何を伝え、何を実践していくか…帰国後のミーティングではさまざまな意見が出され、多くを議論し、その中でも自分たちが『生』で見た北欧の視察施設での世代間交流に対する考え方や風習、日本の文化として昔からある大家族制度の深い意味。これを追及していく一つとして、加瀬ウェルネスタウンにある保育園との世代間交流をより具体的に踏み込んだ形にしていく事になりました。

当初、保育園との交流はユニット間で頻繁に行っており、形式的な交流はおこなっていましたが、入居者が受動的な交流が中心だった為、今回はもう一歩進んだ取り組みを求めました。

それが制作サークルと音楽サークルです。ただ作っている姿や音楽を聴いているだけでなく自分たちで一緒に作り、演奏し、その中で『生きる楽しみ』や『教えたり、教えられたり』を日常の生活の中に組み込むスタイルを基本に各担当者が準備、企画し、実践してきました。フェイスではこの内容の軌跡を各担当者がスタートから完成、今後の課題までを生の声でまとめております。加瀬ウェルネスタウンの柱でもあるウェルネス思想の大切な部分でもある世代間交流の取り組みが全国へ発信され、県内及び全国での取り組みとなることを職員一同願っております。

主任支援相談員 伊藤和哉

世代間交流～秋祭り・制作サークル活動を通して～

制作サークル担当 雲雀ユニットリーダー 千葉涼子

■はじめに

少子高齢化、核家族化、地域の結びつきの低下などの社会の変化に伴い、子供達の成長を地域で見守る意識を持つ事や、高齢者の生き甲斐、社会参加の意味からも世代間交流の重要性が認識されています。

昨年度の海外研修より施設内伝達講習を経て、テーマとなったウェルネス思想を踏まえ、我々海外研修メンバーが当施設の特性を活かせるものをと考えた上で、今年度の取り組みとしては、世代間交流の輪を広げる事を重点に活動することとなりました。

まず、目標を持って継続的に取り組めるものをと考え、お年寄りと保育園児（3歳児対象）との共同作業である為、時間を掛けて取り組める様、4月より秋祭りを目標に半年間の期間設定を組みました。

それに伴い、「音楽サークル」と「制作サークル」の2つの活動を設定し、準備期間はもちろん、当日は地域やご家族を含む各世代の方々にも、ステージ発表や会場のセッティング・展示物を閲覧して頂く機会が世代間交流の場となる事を期待し、企画・立案していきました。

制作サークル活動では、秋祭りの看板と会場の飾りを制作する事となり、参加者が楽しく活動できる様、1か月毎に簡単なテーマを設けました。

*秋祭りまでの大まかな流れ

毎月の活動内容	
7月	画用紙・折り紙の切り方 ぶどう・みのむしの飾り作り／輪つなぎ作り
8月	折り紙：りんご／梨／栗の折り方
9月	折り紙：どんぐりの折り方 お絵かき：似顔絵制作
10月	模造紙へ貼り付け方 会場セッティング

上記以外にも、入所ユニットや通所では、レクリエーションとしてその他作業にも取り組みました。

保育園の先生方と打ち合わせを重ねながら、6月までは活動内容の企画や準備に要しましたが、7月以降本格的なサークル活動を開始しました。

制作では、利用者と園児達の両方の動きを把握し、安全に作業できる様十分配慮する事や、作業の進み具合を見守りながら必要な援助や声掛けをする事。時間配分に気を配りながらも楽しい雰囲気の中で作業ができ、出来上がりを見て喜びを共感できる様に関わっていく事が、我々スタッフが活動を進行する上で配慮が必要だと感じました。利用者と園児達の両方が同時に理解できるよう分かりやすく説明・進行する事の難しさも実感しました。

又、始めと終わりの挨拶をしっかりと行う事や、作業の終わりに園児達に歌を歌ってもらう事など、保育園の先生方のアドバイスもあり、メリハリのあるサークル活動が行えたと思います。

初めての顔合わせでは、利用者の方々も園児達もお互いに緊張していた様子が見られたものの、時間や活動の回数を重ねて行くに連れて徐々に慣れ、お互いに作業を手伝ったり、園児達の無邪気で元気な様子を笑顔で見守っている利用者さんの様子が印象的でした。

秋祭り当日には、たくさんの地域ボランティアの方々や、利用者や園児達のご家族も参觀に来られ、制作サークルが秋らしい雰囲気に飾り付けした会場で、制作と同じく利用者と園児達で結成し、半年間楽器演奏の練習をしてきた音楽サークルの発表で盛り上りました。

利用者も園児達も、この半年間と秋祭り当日は良い思い出になったと思います。



■ 終りに…

世代間交流に参加された利用者さん方からは、作業後も活き活きとした様子で園児達と触れ合った感想が聞かれ、世代間交流を通して「楽しみ」や「精神的な満足感」が得られ、意欲の向上を感じられました。世代間交流を継続する事によって、QOLの向上にも繋がると思われます。

園児達も、利用者と身近に関わる事で「お年寄りを労わる心」「慈しむ心」を育み、「目上に対する礼儀」を養う事が期待できるのではないかと思います。又、世代間交流を通して成長した園児達を見て、ご家族や地域の方々も、お年寄りと関わる環境

の重要性や、お年寄りの役割の大切さを実感でき、全体の活性化が図れるのではないかと思います。

以上より、世代間交流は、子供達との交流で高齢者が生き甲斐を持ち、地域社会に対し貢献する事と、子供達も高齢者との交流で地域の文化に目覚め、地域の人々と豊かな関係性を持って成長して行く事ができるなど、相互的に良い方向へ影響し合うと認識しています。

この様な世代間交流の機会はこれで終わりにせず、今後も継続して一緒に楽しめる機会を作っていく事で、加瀬ウェルネススタウンが大家族としての役割を担っていけるのだと考えています。

なしの美保育園 世代間交流

保育園制作サークル担当者：小林絹子

■制作サークルの活動内容…

利用者の方々が入所する前や若いころに楽しんでいただいた『物を作る』という行為の楽しさを思い出す為に、なしの美保育園の3歳児クラス『さくら組』と製作に興味がある入居者の方が集まって10月に行われる加瀬ウェルネスタウンの秋祭りに向けた活動が始まった。

さくら組はまだまださみ、のりの使い方が不十分な所がある為、入居者の方に教えたり、教えられたり助けていただきながら行ってきました。

秋祭りのステージ装飾の内容を考え、月に1度の開催で製作に取り掛かることにした。第1回はステージを飾るメインの看板の作成にとりかかりました。初めての顔合わせで保育園児も入居者も緊張の表情だったのが印象的です。テーブルごとに分かれ、一緒になってはさみを使い、折り紙をステイックのりで文字の上につけていきました。すきまなく貼っていく園児、手早く貼り、枚数をこなしていくグループ。様々でしたが全ての文字が完成しました。その色とりどりの良さに、「きれいだね!」との声があがり、第2回へとつながりました。2回目では棒状の色画用紙を輪にした物を多数作り、『ぶどう』と細かな色画用紙を手紙の封筒の両面に付けたカラフルな『みのむし』を作った。制作も2回目ともなり、園児、入居者ともに製作意欲が増し、大胆に紙を貼る様子に「元気だなあ!」笑顔で会話する姿も見られてくるようになりました。3回目はりんご、梨、きつねなどの折り紙製作。最後の制作では完成した作品を前に写真を撮り、全員で完成を迎えることが出来、今までの取り組みや関わりを思い出し、感激して涙ぐむ入居者もいました。

■活動を終えての課題

交流を通して思ったことは、秋祭りに展示する作品の取り組みで毎回課題が多くなり、交流をすることよりも製作をすると言うことに精一杯になってしまったことです。

製作の時に、より交流を深めようと利用者の膝に子供が乗って製作したことがあった。しかし、「落ちそうで恐かった」等の意見や同じ活動ばかりで飽きる姿もあったように思う。また、デイケアの利用者も参加できるよう多目的ホールに場所を移したが、時間の都合か、一度も一緒にかかわれなかつたことは残念でした。

しかし、月に1度でも沢山の作品が完成し、最初に目的に掲げた入所者が受動的ではなく自分たちで選択し、自分たちで作り、関わられたのではないかと思う。これからも日々の関わりを見つめ、世代間交流が自然な形でおこなわれることを大切にしていきたい。



世代間交流～秋祭り・音楽サークル活動を通して～

音楽サークル担当 鶯ユニット ケア・コンシェルジュ 山 内 祐

■はじめに

平成20年10月18日、加瀬ウェルネスカウン秋祭りにて、なしの美保育園の園児と介護老人保健施設加瀬ウェルネスカウン入居者の有志による合同発表会が開催されました。大盛況に終わった発表会、この合同発表会を開催するきっかけとなったのは、私が勤める老人保健施設加瀬ウェルネスカウンに保育園が併設されている事が関係しています。今までの交流として保育園と各ユニットでの交流会はありましたが、ユニットの垣根を越えての大々的なものではなく、世代間交流を目的とした大掛かりな企画を立ち上げる事になり、6月から動き出した世代間交流活動のメンバーの一人に私はなりました。

■活動内容

まず、活動をするにあたって保育園との調整が必要不可欠であり、なしの美保育園の先生方にも協力を仰ぎ、メンバーとして世代間活動の会議に加わっていただきました。

その会議の結果、世代間交流活動の主な目的として園児・入居者とが一つの活動に参加し、その活動を通して生まれる喜びや達成感の共有。そして、活動を通して園児・入居者間で自然と生まれるふれあいを狙い、合同活動として、月1回～開催する音楽サークル、制作サークルの2つが誕生し、私は音楽サークルの担当となることに決定しました。

■音楽サークルでの活動

音楽サークルでは、はじめに発表をする園児・入居者の有志を募り、混合の2グループが出来、発表会のある秋祭りに向けて演奏の練習を保育園の

先生方と協力して活動を進めていくことになりました。ですが私は音楽関連に対しての担当経験がなく、最初の曲選びから苦戦してしまうことになってしまったのですが、私は園児・入居者の双方になじみがあり、演奏がしやすく発表時期である秋に関連する曲も選びたかったので、悩みながらも曲を選び、そして保育園の先生との話し合いの末、①グループ「山の音楽家」「虫の声」、②グループ「幸せなら手をたたこう」「たきび」の各2曲が発表会での演奏曲目に決定しました。

使用する楽器も決まり、はじめての合同練習を迎えることになったのですが、その合同練習の結果、私は何か物足りなさを感じました。合同練習の時間は30分と短い時間のように感じますが、2グループに分かれそれぞれ練習をしていたので1グループ2曲を練習するには時間が長く、園児には飽き、入居者には疲労感が感じられたからです。そして私は考えの末、合同練習の演奏前に日々のレクリエーションで培った体操や簡単な手遊びを取り入れてみる事にしてみました。すると2回目の合同練習では、園児・入居者双方の緊張もほぐれ、巧く演奏練習に繋げていくことが出来、そうして私はそれ以降もその手法を取り入れ工夫し、本番である10月の秋祭り発表会に向けて音楽サークルを盛り上げていこうと考えたのです。

順調に合同練習も進み9月になると秋祭り担当者との打ち合わせが加わり、当日設置するステージの形、発表者の発表位置、当日発表会の司会原稿、綿密なタイムスケジュールなどを作成することになり、めまぐるしい日々が続きました。そして、沢山のいろいろな方々の力を借りて10月18日ようやく秋祭り世

代間交流発表会を迎えることとなったのです。

発表会を終えることができたのでした。

■そして世代間交流発表へ

発表会当日、私は緊張していました。それは何故かというと、準備等の慌ただしさや発表会の司会を務めるという大役があったということが私の緊張していた理由の一つにあげられましたが、それ以上に、今までの合同練習の成果披露の場が近づいてきたという実感が沸き上がってきた事が緊張の一番の理由でした。発表者が今までの練習の結果を披露する為に緊張するという事はわかりますが、しかし私の場合は、音楽サークルに参加した発表者をこれまでの期間、合同練習をまとめ見守ってきたという、担当以上の気持ちがあり世代間交流活動に深く関わってきたからでした。

そしていよいよ発表会が始まりました。中には緊張で顔が強張っている発表者もいましたが、殆どの発表者は笑顔で歌をうたい楽器を鳴らし演奏をする姿が見受けられました。園児と入居者のその姿を見る事が出来、それだけで私は音楽サークルの担当を続けてきた甲斐があり、これまでの日々が充実していたものだと実感したのです。

そして冒頭で述べたように、無事に世代間交流

■活動を終えてみて

有志で集まった園児と入居者が十分にこれまでの練習の成果を發揮した発表会、とても素晴らしいものがあったと思います。しかし、私はこの世代間交流活動を終えてみて思ったことがあります。それは何かというと、発表会の成果はよかったです、園児と入居者との自然なふれあいという世代間交流活動の目的が達成に足らなかったということです。

これは、合同練習の際に園児・入居者共に曲を覚え楽器を演奏する練習に手いっぱいでのコミュニケーションが不足していたからです。このようなことになったのは私の段取りが悪いことが原因の一つにあげられました。もっと段取りを良くし、合同練習時にコミュニケーションをとる時間を設けていたならば、この目的を達成出来ていたのではと私は考えます。

今後、世代間交流活動を続けていく際には、このような事がない様に反省点を生かし園児・入居者のコミュニケーションの取れる時間を設けて段取り等準備をおこない、この世代間交流活動をより素晴らしい活動にして行きたいです。



なしの美保育園 世代間交流

保育園音楽サークル担当者：高 橋 優 子、武 田 壮 史

■音楽サークルの活動内容…

月に1度の音楽を通した交流と言うことで、子供達と入所者の方が集まって楽器演奏の練習をしてきました。交流の日以外でもグループ又は、クラス毎に練習を行ってきただけあり、完成度の高い演奏となりました。秋祭り当日もお互いに緊張はあったが『音楽の発表』としては成功だったのではないだろうか。子供達は発表が成功し、沢山の拍手をもらつたことで、やり遂げた満足感や楽器を鳴らす楽しさは味わうことができたと思うが、本来のねらいである『交流』として考えた時にはどうだったのだろうか？

『発表するための練習(交流)』になってしまい、「おじいちゃん、おばあちゃんと一緒にがんばる!」と言う意識はあまりなかったようにも思う。

初めから『秋祭で発表』と言う大きな課題があつた為、1回目の練習から「曲に合わせて楽器を鳴らす練習」をしてしまった。その結果、1人1人が目の前の楽器を鳴らすことに精一杯になり、肝心の『交流』の場とはならなかつたのではと深く反省した。

その違和感を無くすため、2回目からは後半、ふれあい遊びを取り入れた。自発的にできる自然なかわりまでには発展できなかつた。同じ敷地内の空間で生活している環境ならではのもつと深い交流ができるのだろうかと思う。

■活動を終えての課題

今後の課題としては、もっと子供たちと入居者の方々と“自然体”的な姿を感じとつてもらえるような交流が必要だと感じた。練習や発表にとらわれず、普段の交流の中で触れ合う時間を増やして、子供達と入居者が互いの名前を覚えたり、顔なじみの自

然な雰囲気を作つていきたい。

そうすることで周り(地域)にも関わりが見えてき、子供達も入居者の方も今まで以上に笑顔が増え、次の交流を楽しみにして迎えることができるのではないか？

交流の手段の1つとして楽器があり、自由に楽器遊びをする中で生まれる自然なふれあいの中で『一緒に楽器を鳴らすと楽しい!』と感じられれば良いと思う。

最後になるが、『発表の為の交流』ではなく、『交流の中にある発表』という事を忘れずにいたい。これからが本当の意味のスタートであり、職員間の連携を密にしていく必要があるのではないかと感じる。



世代間交流を通して

主任支援相談員：伊 藤 和 哉

■はじめに

昨年、北欧の施設を視察し学んだことの一つに、心から楽しめる「交流・共生」が重要だということがありました。

利用者と園児が交流をすることは、高齢者にとって「楽しみ」「生きがい」が生まれ、「生きる力」が引き出されます。園児には、幼いころから高齢者と接することで、「優しさ・思いやり・尊敬の心」が身に付き、自然な形で福祉に対する興味が芽生えます。

視察を通して学んだ事を実際に行動に移すため、「音楽サークル」「制作サークル」を立ち上げ、なしの美保育園との世代間交流を今年6月から開始する事になりました。

■世代間交流の実施を通して

世代間交流の統括として取り組むことになり、各サークル担当者や先生方と協力しながら進めて参りました。

実施するに当たり、なしの美保育園の園長先生に今回の交流の趣旨や内容を伝え、協力していただきたい旨を説明に伺い、「なしの美保育園としても賛成です。交流しやすい環境で、園児にもいい影響になるでしょう」と快く了承していただく事ができ、先生方との話し合いを持ちすすめていくこととなりました。

参加利用者は、自己決定に基づき希望者を対象に、全ユニットから多くの利用者が、参加を希望されました。園児は2歳から5歳児を対象に、両サークルとも10月の秋祭りに向けて取り組むこととし、月1回40分程度の限られた回数の中で行ってきました。



交流初日はどちらも表情が硬く、どう接したらいいのか、仲良くなりたいというような緊張と期待の表情で参加しているように見えました。今まで利用者は、散歩中に園児の様子を遠くで見ているだけであり、あまり接する機会がありませんでした。もちろん一緒に何かをするということも初めての方が多くおり、お互いに緊張するのは当然のことです。

特に園児は、利用者と園児が握手をするよう先生に言われてもなかなか利用者に近寄ろうしない子、園児同士でかたまってしまうこともあります。一方利用者は、握手した手を離そうとせず「お年いくつ?」「お名前は?」と声を掛け、頭を撫でてあげる姿がみられました。

交流の回数を重ねるごとに、お互い顔馴染みとなり、進んで交流する様子がみられるようになりました。中には制作中の手を止めコミュにケーションをする姿が多くなってきました。

中でも印象に残っているのは音楽サークルの練習を終え、ユニットに戻ってきた利用者に、どんなことをしてきたのかと尋ねた時です。普段は認知症で数分前のことも忘れてしまう方が「子供たちと歌を歌って遊んできた。楽しかった、また行きたい!」と印

象強く覚えており、楽しまれています。

秋祭りの発表当日は、大勢の観客の前で演奏し、緊張の中にも達成感に満ちた表情をしていました。普段人前に出ることの少ない利用者にとって、とても緊張したと思いますが、その緊張感も逆に良い刺激となったのではないかと思います。

■今後の課題

全体としては、目標を高く設定したためか、作品の制作、演奏の練習に多くの時間をつかい、ふれあい、会話という「交流」の時間が少なかったように

思います。しかし、利用者の表情はイキイキしており、利用者の言葉からも分かるように、楽しんでいただけたと思います。

次年度に向けた活動では、自然なふれあいを大切に、この交流を通して利用者が「楽しみ」「生きがい」を見つけ、園児は高齢者を思いやる気持ちが身につける場となるようにしたいと思います。そして、地域に根ざした施設として、地域福祉の一助となっていけるように活動を継続していきたいと思います。



交流を通した全体総括

今回の世代間交流は各部署からのレポートにもあったように、より具体的な関わりを形にし、展開して参りました。その中にはたくさんの苦労や、工夫そして写真やフェイスでは伝えきることの出来ない笑顔やふれあいがありました。この交流から出た反省や課題は今後さらに検討し、自然な形で交流できるようにしていくかなくてはなりません。

しかし、私たちの生活しているこの加瀬ウェルネスタウンでは、入居者と子供が常に触れ合い、行ききできます。そしてこのハードこそウェルネス思想が形となったものであり、ごく自然なものなのです。

子供達は、おじいちゃん、おばあちゃんの匂いを肌で感じ、この『街』で生活することができます。また、入居者も子供達と自然な形で関わることで、まさに生きる力となり、昔、どの家庭にもあった役割が出来、いたわる心や深い愛情が芽生えてきます。そして、これは施設の理念でもあるウェルネス思想の深い根幹部分でもあります。だからこそ私たちは、このフェイスを通して、広く医療や福祉に携わる方に情報として発信し、ディスクローズして行かなければならぬと節に願うのです。

加瀬ウェルネスタウンとスウェーデンの ユニバーサルサービスの類似性についての考察

事務局次長 尾形勝通

本喜英会に入職して驚いたことがあった。

それは経営者層と共に、介護部長、看護師、通所リーダー、リハリーダー、ユニットリーダー等の十数名がスウェーデンの福祉施設、福祉行政を視察し、その考え方を深く理解し、施設運営の中で実践されていることであった。

私は学生時代からスウェーデンという福祉先進国に強く魅かれ関心を寄せていました。専攻した比較政治学の教授はスウェーデン研究者の第一人者であり、現在は副学長になっておられるが30年経った今でも、私が壁に当たった時、苦しい時、人生の転機が訪れる都度に『生きるということ、哲学すること』を教え授けていただいている。その教授の薦めもあってストックホルム・ガムラスタンに宿を取り、市の福祉政策とナーシングホーム等を視察したのだった。

その数年後に加瀬ウェルネスタウンに出会い、その視察で学んだ事が、ここ日本の利府町で体現されていることに運命的な出会いを感じざるを得なかった。

福祉、医療、教育というサービスはもともと、人間と人間との継続的触れ合いに基づいて社会システムの内部で、相互扶助によって生産されていた。このサービスは「対人社会サービス」と呼ぶことが出来る。このサービスはユニバーサル（普遍的）に供給されなければならない。市場経済至上主義でこの仕組みが困難になっているのが今の日本の現状といえる。市場経済での過酷な競争に敗れれば本来の社会システムの自発的協力という「愛」に包まれて、人間は生存せざるをえない。今の日本に欠落したユニバーサルサービスをスウェーデンから学び実践する時がまさに「友愛」を掲げる現政権の日本のコアな政策課題であるべきだ。

スウェーデンでは子供が病気に倒れれば、コミューン、つまり市町村からヘルパーが派遣され、両親に代わって子供の世話をしてくれる。両親は欠勤せずに仕事を続けることができる。保育園もコミュニティごとに可能な限り家族と同じように小さく作られる。「保育園」という意味そのものが「昼間の家庭」という意味もある。クラス編成も年齢別に編成されること無く、兄弟や姉妹のような触れ合いを維持しようとする。

もちろんユニバーサルサービスは、育児という子育て支援サービスだけではない。

高齢者になれば、市町村職員が手厚い養老サービスを供給する。スウェーデンでは、人々が最後の瞬間まで自立して生きていくことを望むため、年老いても在宅で生活しようとする。こうした在宅の高齢者には、無料でホームヘルプサービスが配達される。しかも、緊急アラーム・システムが完備されている。腕時計型とペンダント型のアラームを押せば、直ちに部屋にある電話とステーションとで会話をすることが可能となる。ヘルパーが適切な指示をし、駆けつけてくるシステムとなっている。

こうした配達サービスだけではない。立地点(施設)サービスとして、ケア付住宅、老人ホーム、複数の障害者が介護者と一緒にになって暮らすグループホーム、介護と医療が一体となったナーシングホームなどが、高齢者のニーズに応じて供給される。旧型の老人ホームでさえ、個室のスペースは狭いもので41平方メートルもある。旧型の老人ホームは居室と寝室を分離しているため、高齢者の生活にとって利便性に乏しく、近年の新型の老人ホームでは一部屋で大きくスペースをとるように工夫されている。

老人ホームも出来るだけ、家庭と同じようにデザインされている。

加瀬ウェルネスタウンの入所棟のユニットの居室面積は国の規格面積より大きく超える24平方メートルと広く取ってあるのは特筆すべきであろう。部屋には嫁入り道具で持ってきた思い出の箪笥が置かれ、思い出の品々が所狭しと飾られている。入り口には、木の表札があり若い頃元気で輝いている頃のセピア色の写真が飾られているのが当施設の「家庭の延長」「普段の生活とかわらないところ」に暮らしてもらうという理念が体現されており、スウェーデンと同じ考え方で運営されているのだ。

スウェーデンでは食堂は民営化され、厳格な入札条件のもとに、民間の食堂業者が請け負っている。しかもそうした食堂は、コミュニティの住民にも開放されている。そしてそこに人間と人間との触れ合いが生まれる。コミュニティの子供達は食事に訪れるとともに、高齢者の車椅子を押すようになる。子供達は人間が老いていくことがどういうことなのかをみつめ、老いていく者からの思いやりも学ぶ。まるで加瀬ウェルネスタウンの保育園との大家族としての暮らし、カフェや駄菓子屋での老人とのふれあいの現場と同じ情景ではないか。

老人ホームは、卓球場などのスポーツ施設、チェスやダンスホールなどのレジャー施設も完備され、在宅の高齢者も利用に訪れる。在宅の老人の利便性を考え、ストックホルム市では、地下鉄の駅の上には、必ず老人ホームを設けている。日本では、病院の待合室が高齢者の社交場になっているとわめきたてる。しかし、病院

の待合室にしか社交場を見出せないような哀れな状態に、高齢者を追い込もうことを恥ずべきであろう。

以上述べてきた通り、加瀬ウェルネスタウンはスウェーデンのユニバーサルサービスに限りなく近づいているのが解る。世代間交流複合型福祉施設の完了形とまではいわないまでも、現在の日本の福祉、医療、教育サービスの在るべき姿を凝縮し、現在進行形のユニバーサルサービスを形成しているのではないかと思われてしかたない。

十符の里フェスティバル利府祭人コンテスト優勝

毎年、宮城県利府町で行われます利府町あげてのお祭り、十符の里フェスティバルが今年も盛大に行われました。

このお祭りは利府町で年に1回、各地から毎年様々な催し物を呼んで開催されています。中でも利府祭人コンテストへは当施設の加瀬ウェルネスタウンは開所翌年から毎年参加させていただいており、今年はなんと、4年連続の優勝!施設あげての応援にも熱が入りました。

利府祭人とは、利府町独自の踊りです。毎年当施設では新人職員を中心に、勤務が終わった空き時間などをを利用して練習に取り組んでいます。利府祭人の踊りの基本を生かしながら、当施設の看護師が振り付けを考え、衣装も独自の視点から『華やかさ』と『楽しさ』を演出しています。

第20回 利府祭人コンテスト 優勝

第19回 利府祭人コンテスト 優勝

第18回 利府祭人コンテスト 優勝

第17回 利府祭人コンテスト 優勝

第16回 利府祭人コンテスト 3位

第15回 利府祭人コンテスト 優勝

輝かしい功績を残しながら…、すでに来年に向けて動きだしております。

利府町は様々な歴史、文化が根付いた町です。新しい新興住宅地を近隣に構え、ニュータウンとしての役割も大きく、これからますます大きく発展する地区です。是非、利府にお立ちよりの際は、当施設加瀬ウェルネスタウンにもお越しください。職員一同心よりお待ち申し上げております。



編集後記

.....

今回で2回目の発刊となり、その中でも看取り(ターミナルケア)や当施設独自の保育園との交流を題材として進めて参りました。

施設内での取り組みを少しでも皆様に知っていただき、また共感できる事や新しい発見、議論ができればと考えています。

編集担当 主任支援相談員 伊藤和哉

(平成19年 敬称略、順不同)

氏名	役職
菊地輝代	法務省人権擁護委員
井上養朔	社会福祉協議会 青葉区旭ヶ丘地区 会長
菅原帛	社団法人みやぎ被害者支援センター 副理事長
菊地滋子	社会福祉協議会 宮城野地区会長 仙台市民生委員児童委員協議会 顧問
星茂	社会福祉協議会 宮城野区新田地区 会長
郷右近健司	利府町行政区長・加瀬町内会長
美濃谷文子	利府町民生委員児童委員

[不許複製]

発行日／平成21年11月30日

発行／医療法人社団 喜英会 介護老人保健施設

加瀬ウェルネスタウン

Tel.022-349-1717 Fax.022-349-1716



医療法人社団 喜英会

加瀬ウェルネスタウン

介護保険事業者番号 宮城県第0452680036号

介護老人保健施設 通所リハビリテーション 指定居宅介護支援事業所 加瀬クリニック なしの美保育園(認可)

〒981-0111 宮城県宮城郡利府町加瀬字北塙 16 番 1

TEL.022-349-1717

FAX.022-349-1716

E-Mail kiekai.kase@poem.ocn.ne.jp

<http://www16.ocn.ne.jp/~kase/>

デイサービス
ウェルネスガーデン紫山

事業所番号 0475501946

〒981-3205 仙台市泉区紫山2-32-8
Tel.022-341-9380 Fax:022-341-9381
E-Mail:kiekai.murasakiyama@bell.ocn.ne.jp